

社会への橋渡し役「アイセック」

法学部2年
高田 麻衣



ケニアのアイセックのメンバーに歓迎される日本人メンバー



今年の冬、「トヨタ」で開かれた歓迎式に出たフィンランドの研修生

「目的意識、明確に」

国際性と社会性を備えた若者育てよう

研修生、相次ぎ海外へ

「それじゃ、行ってきます」――5月末、大きく手を振ってスイスへ向けて出発した佐藤明信君は青山学院大学4年生。ことし彼は大学を休学し、現在はスイスにある医療器具のマーケティング会社で研修生として働いている。彼は、われわれ「アイセック（AIESEC）中央大学委員会（委員長・総合政策学部2年渡辺匡弘）の仲介で、海外インターンシップを実現させた2人目の研修生である。

日本の多くの学生は、ビジネス社会の経験も知識がほとんどないまま大学を卒業し、「働く」という意味をしっかりと把握しないまま就職していくケースが多い。インターンシップとは、そういう学生に対して、ビジネス社会に触れる機会を提供するための制度で、いまや世界85カ国、5万人の学生が参加する世界最大の学生団体である。私たちは学生と社会の間をとりもつ団体といえる。具体的な活動としては、自国の学

生の海外の企業やNGOに研修生として送り、逆に海外の学生を日本に受け入れる。「異文化体験」「実務体験」の機会を通して、「国際性」と「社会性」を兼ね備えた若者の育成を目指しており、今回は他大学生である佐藤君の研修幹旋も中大が担当した。

日本国内でアイセックに加盟しているのは24大学。中大委員会は10年ほど前に発足した。中大の場合、日本側の受入れ企業としてトヨタ自動車に、毎年1人の学生を送っている。ことは、さらに人材派遣会社の「スキル・ビジョン」社が、これに参加現在、アメリカの女子学生がここで研修中だ。

来月、本学の女子学生2人ケニアへ

一方、送り出しの方は、ことし5月末に中大委員会から送り出した初のNGO研修生、池沢貴弘さん（中大大学院卒）がアフリカ・セネガルの研修先から帰国した。そして青山学院大の佐藤君、さらに今年8〜9月の2か月間、石井晴子さん（法学部4年）と田中弓子さん（総合政策学部4年生）をケニアのNGOへ送り出す。

り出す。

私はそのうち、石井さんのパーソナル・オフィサー（研修生がどんな学問分野に興味を持っているかを念頭に置きながら、研修生の個人的ケアを行う）を行う仕事を担当した。昨年の7月、石井さんに出会った。この日は彼女が研修生としての人間性をみるための面接の日だった。



来月のケニア行きを控え、準備に忙しい石井さん

面接官にはJVC（日本国際ボランティアセンター）のアフリカ事業担当の奥野久美子さんに依頼した。奥野さんの「石井評」は「目的意識が明確でない」に始まり、「発展途上国のNGOで働くという認識が低い」という指摘にいたるまで、すべて厳しいものばかりだった。

面接を終えた石井さんは「研修を甘く考えていました。目的意識を高めるために今、やらなければならぬことはなんだろう」と本気で考えた、という。ケニアでインターンシップをしようと思ったきっかけについ

ては「自分のなかで明確なものがありませんでした。とりあえず挑戦してみよう、という程度の気持ちで、私の根底にあったと思います」と、正直に話してくれた。

以来、私たちアイセックのメンバーは、より目的意識を明確にする手段として、各種の勉強会やセミナーを開き、在日ケニア人や石井さんと同様、研修をひかえた他大学生

からも話を聞いたりした。その結果、次第に研修意欲も明確になっていった。そんな中で就職活動も始まり、石井さん自身、みごと自動車部品メーカー会社に内定した。

石井さんは研修での経験を、ぜひ就職後に生かしたいと思っている。具体的には「海外各国と市場と日本の市場を通じて、民間企業のあらゆる経営マネージメントを身につけること。そして、これを国際協力に役立てたいのです」と力強い。石井さんの1年前の「夢やあこがれ」は、「自信と確信」へと変わった。

先にある障壁に不安を抱きながらも、自分の理想を持ち続けようとする石井さんの生き方に、本当のアイセックの魅力を感じ取れるのかもしれない。

アイセック中央大学委員会ではスタッフを募っています。同時に海外研修の応募もお待ちしています。

【連絡先】中央大学商学部3年 佐藤 義典

【携帯電話】090・9958・6876

【メールアドレス】y.sato@dj8so-net.ne.jp